

(海外・国内) 出張報告書 (学生用)

2014 年 9 月 30 日提出

|      |                                                                            |
|------|----------------------------------------------------------------------------|
| 氏名   | 矢野 沙織                                                                      |
| 所属   | 生理学教室                                                                      |
| 学年   | 博士課程 3 年                                                                   |
| 出張先  | The Dijon Congress Center (ディジョン・フランス)、<br>Saarland University (ホンブルク・ドイツ) |
| 出張期間 | 2014 年 9 月 8 日～16 日 (9 日間)                                                 |
| 目的   | ECRO2014 でのポスター発表、<br>インターンシップ予定の Saarland University への事前訪問               |

活動内容 (2,000 字程度、活動内容が判る様な写真や図表を加えて下さい)

今回の出張の目的は、来年のインターンシップ先であるドイツ・ザールブリュッケンにある Professor Trese Leinders-Zufall の研究室を訪問すること、さらに 9 月 10 日から 9 月 14 日にかけて開催された 24th International Conference of European Chemoreception Research Organization (ECRO2014)への参加という 2 点でした。

ザールラント大学はドイツ・ザールラント州のザールブリュッケンとホンブルクに位置する州立大学です。法学・経済学部、人文科学部、自然科学・工学部、医学部等計 8 の学部から形成されています。今回訪問する Professor Leinders-Zufall の生理学教室はホンブルクに位置する医学部キャンパスに構えられているため、私の到着したザールブリュッケン駅からキャンパスまで Professor Leinders-Zufall が車で送迎してくださいま



図 1 Professor Leinders-Zufall の生理学教室の入る建物

した。キャンパスに到着すると、研究室内の実験施設や動物飼育室等を見学し、研究室で行われている研究内容について紹介を受け、インターンシップの際に行う研究内容についてディスカッションを行いました。Professor Leinders-Zufall は同学部の別の生理学教室を管轄する夫の Professor Frank Zufall と共同研究を行っており、そのため両研究室間で人や実験、議論の盛んな交流が行われています。その為豊富な研究手法やアイディアを持ち、それらの武器が世界トップクラスの嗅覚研究を可能にしていることが感じられました。

その後研究室のメンバーと昼食を共にし、世間話に花を咲かせました。研究室には、ドイツ人だけでなく、オランダ人・スペイン人・中国人等国际色豊かなメンバーがいるため、基本的に会話は英語で行われました。昼食後も実際の実験を見せてもらったり、私自身の研究内容やインターンシップ時に行う研究内容について個々のメンバーと相談したりと、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

翌日早朝にはドイツを発ち、ECRO2014 の会場である Dijon を目指しました。Dijon は、フランス東部のブルゴーニュ地域圏に位置する都市です。かつてブルゴーニュ公国の首都として栄えたこの都市には、宮殿や教会等歴史的な建造物が数多く残されています。住居や店舗等もこれらと調和する昔ながらのたたずまいの様式で統一され、非常に美しい都市です。一方で街から少し離れるとそこには広大な畑が広がっています。ブルゴーニュワインの材料となるブドウ畑が一面に広がっており、収穫の時期の近づいたブドウが実っていました。

学会の会場である The Dijon Congress Center は、Dijon 駅から 2km 程離れた静かな住宅街の近くに 있습니다。本学会は味覚・嗅覚といった化学受容器に関する研究の発展を目的として 1970 年に発足し、以降 2 年に 1 度の頻度で国際会議を開催していましたが、近年は同分野の研究の進展が加速してきていることもあり、毎年 1 回の頻度で開催される



図 2 学会会場

ようになりました。会場にはヨーロッパ各国を中心に、アメリカ、日本、中国等から 200 人程の嗅覚・味覚の研究に携わる人々が集まっていました。本学会は 4 日間開催され、連日嗅覚・味覚の最新の研究について密度の高い議論が行われました。これまでこうした専門学会に参加したことのなかった私にとって、どの発表も目新しく、非常に興味深いものでした。

私は本学会の 3 日目にポスター発表を行いました。昼休憩後の 13:30 から 14:30 と Parallel Symposium 後の 16:30 から 18:00 の、合計 2 時間半のコアタイムが設けられていました。“Odor-dependent enhancement by estradiol of neural activity in accessory olfactory bulb of female mice.”というタイトルで、学部学生時代から研究してきた、雌マ



図 3 ポスター会場

ウスが雄マウスを選択する性質が発情周期に依存して変化するという現象について紹介しました。海外での学会発表は私にとって初めての経験だったため、発表前は非常に緊張しましたが、始まってしまえば多くの人が自分の研究に興味を示してくれることが嬉しいばかりでした。コアタイムの間に、空腹ホルモンと嗅覚の関連性を研究する Dr. Jorg Strotmann や学会 Organizer の Dr. Maria Klyuchnikova、Professor Leinders-Zufall の研究室から Plenary Symposium の演者として出席していた Dr. Pablo Chamero や、その他多くの研究者と有意義なディスカッションをすることができました。

また学会の学術発表以外の時間、例えば休憩時間や昼食、Welcome reception 等の時間には、近くに居合わせた研究者と会話を楽しむことができました。この学会の機会に、これまで会ったこともなかった同業者と親交を得ることができたのは非常にありがたいことでした。今後の研究生活でもこうした縁を大切にしていきたいと思います。



図4 Welcome reception の様子

単身での出張で不安な面も多くありました。図4 Welcome reception の様子が予想以上の成果を挙げることができ、今回の出張は非常に実り多きものであったと思います。一方で、英語の聞き取りに自信が持てないために会話の上で不自由を感じるといった語学面での課題もみられました。今回の出張で得られた自信・課題を今後活かしていきたいと思います。最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださいました生理学教室の先生方、リーディングプログラム関係者の皆様に心より感謝致します。

|         |                                 |
|---------|---------------------------------|
| 指導教員確認欄 | 所属・職・氏名：<br>生理学教室 教授 葉原 芳昭<br>印 |
|---------|---------------------------------|

※1 電子媒体を e-mail で国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出するとともに、指導教員が押印した原本を国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出して下さい。

提出先：国際連携推進室・リーディング大学院担当

内線：9545 e-mail: leading@vetmed.hokudai.ac.jp